科目ナンバリング	U-LAS05 20009 SJ40				
授業科目名<英訳>	社会人類学調査演習 Seminar of Social Anthropological Research		担当者所属職名・氏名	人間・環境学研究科 教授	岩谷　彩子
群	人文・社会科学科目群	分野(分類)	地域・文化(各論)	使用言語	日本語
旧群	A群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	ゼミナール（対面授業科目）
開講年度・開講期	2026・後期	曜時限	木2	配当学年	全回生	対象学生	全学向

[授業の概要・目的]

本講義では、人類学の主要な調査手法であるフィールドワークと、そのなかで出会う人々の語り（ナラティブ）を分析する方法論を学ぶことで、いかに人々のライフヒストリーを描くことが個人を取り巻く社会や文化について明らかにすることになるのか、議論と実践を通して明らかにすることを目指す。

講義では、まずフィールドワークとは何か、その方法論と、フィールドワークの産物であるエスノグラフィとは何か、学んでいく。次に、社会や文化を統一的な全体として描くことの限界について、インタビューとナラティブ分析の手法をもとに考察する。第三に、個人が語る日々の実践や過去の出来事を生活史（ライフヒストリー）として描くことの可能性について、ライフヒストリーの方法を用いて書かれたエスノグラフィを事例に考察する。これらを段階的に学んだ後、受講生は実際に自身が選んだ他者に話を聞き、その人のライフヒストリーをエスノグラフィとしてまとめることを通じて、授業の趣旨を実践的に理解する。

[到達目標]

・社会や文化による被拘束状況を生きる人間が、自らの状況を語り直すなかで自身の社会的な立ち位置を調整したり、創出したりしている過程に着目することで、個人と個人を取り巻く社会環境について動態的に理解できるようになる。
・「主観的」な語りがエスノグラフィックな「データ」となる、ライフヒストリーという方法論を習得する。
・語りに依拠したアプローチがもつ限界や倫理的な問題についても考察できるようになる。

[授業計画と内容]

1．講義と講師の紹介
2．フィールドワークと人類学
3．エスノグラフィとはなにか
4．文化を書くということ
5．ナラティブ・アプローチの可能性
6．ライフヒストリーとはなにか
7．ライフヒストリーと歴史
8．ライフヒストリー研究の方法
9．オートエスノグラフィとはなにか
10．語られること、語られないこと
11．エスニシティをめぐるライフヒストリー（購読）
12．ジェンダーをめぐるライフヒストリー（購読）
13．超自然的存在をめぐるライフヒストリー（購読）
14．レポート作成に向けて
15．フィードバック

社会人類学調査演習(2)へ続く↓↓↓

社会人類学調査演習(2)

[履修要件]

人類学関連の講義、あるいはフィールドワークを含む講義を履修した経験があるか、本講義と同時に履修していること。

[成績評価の方法・観点]

授業への出席が前提となる。平常点（参考文献の報告、討論への積極的な参加）（50%）、期末レポート（50%）で評価する。

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）
石原真衣『〈沈黙〉の自伝的民族誌ーサイレント・アイヌの痛みと救済の物語』（北海道大学出版会、2020年）
クラパンザーノ、V.『精霊と結婚した男―モロッコ人トゥハーミの肖像』（紀伊國屋書店、1991年）
クリフォード、J.、マーカス、G.（編）『文化を書く』（紀伊國屋書店、1996年）
佐藤斉華『彼女達との会話ーネパール・ヨルモ社会におけるライフ／ストーリーの人類学』（三元社、2015年）
谷富夫（編）『ライフヒストリーを学ぶ人のために』（世界思想社、2008年）
中野卓・桜井厚（編）『ライフヒストリーの社会学』（弘文堂、1995年）
野口裕二『ナラティヴ・アプローチ』（勁草書房、2009年）
朴沙羅『記憶を語る、歴史を書く―オーラルヒストリーと社会調査』（有斐閣、2023年）
保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリーーオーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』（岩波書店、2018年）
ラングネス、L.L.、フランク、G.『ライフヒストリー研究入門―伝記への人類学的アプローチ』（ミネルヴァ書房、1993年）

[授業外学修（予習・復習）等]

授業で示される文献を必ず事前に入手し、読んだうえで授業に臨むこと。
最終レポート作成に向けて、授業外でのインタヴュー調査が求められる。

[その他（オフィスアワー等）]

授業では受講生が関連文献を報告する参加型の演習であるため、履修制限を行う。
積極的に授業での議論に参加すること。

[主要授業科目（学部・学科名）]

総合人間学部